

【特別企画】

政策提案型パブリック・ディベートの実践 ー Teams を用いた高専の授業のケースー¹

**A Practice of Policymaking Public Debate:
A Case Study in a KOSEN Class Using Microsoft Teams**

上田真梨子

徳山工業高等専門学校

UEDA Mariko

National Institute of Technology, Tokuyama College

This paper reports on a class activity where students engaged in policymaking public debates, using Microsoft Teams. For pre-debate activities, students participated in Japanese-language value and policy debate matches, followed by writing English essays on the same topics. Next, students participated in a policymaking public debate, a form of debate proposed by Sanaga in his 2017 book. The topic of the debate was “Balancing stable energy supply with achieving a carbon-neutral society.” After the debate matches, students created English video presentations about policy proposals over the topic.

Key words: debate, public debate, pre-debate activities, post-debate activities

Debate and Argumentation Education: The Journal of the International Society for Teaching Debate
2025, Vol.7, pp. 45-61.

1. はじめに

パブリック・ディベートとは一般市民にも聴き取りやすく、理解が容易なスピーチを展開し、社会の問題を解決するための政策について討論するゲーム（佐長，2017, 6-7）である。競技ディベートが肯定・否定の相反する立場で自らの優位性をジャッジに訴えて勝敗を競

¹ 本研究は JSPS 科研費 JP23K00669 の助成を受けて行われたものです。

う試合展開であるのに対し、パブリック・ディベートは必ずしも対立しているわけではない。2つのチーム（先攻と後攻）がそれぞれ政策を提示し、質問や意見交換をしながら、両チームが協力してよりよい政策を練り上げていく試合展開になっており、本稿で扱うディベートでは、政策提案向けのトピックを用いた。

A 高等専門学校（以下、高専）の令和 5 年度後期の 5 年生の人文社会系の選択科目でグループウェア Microsoft Teams（以下、Teams）を用いて日本語でライティング形式のパブリック・ディベートの実践を行った。パブリック・ディベートに至る前段階の活動、試合での議論展開の特徴、事後活動として行った英語プレゼンテーション動画作成について報告し、受講者へのアンケートから今後の指導の改善点を考察する。

2. パブリック・ディベート実践の先行事例

2.1 社会科教育におけるパブリック・ディベート

パブリック・ディベートはアカデミック・ディベートが早口で難解なスピーチによって一般市民の聴衆を遠ざけてしまうことから、社会科教育の分野で模索されてきた。佐長（2017）はパブリック・ディベートの目的について、以下の様に述べている。

政策提案型のパブリック・ディベートは、一般市民にも聴き取りやすく、理解が容易なスピーチを展開し、社会の問題を解決するための政策について討論するゲームを展開する。伝統的なアカデミック・ディベートのスタイルから自由になって、誰もが親しめる、学び合いのディベートを行う。そうすることによって、市民として社会の問題や論争について考察を深めることを目的とするのである。（6）

初心者でも取り組める対話を重視したパブリック・ディベートのスタイルは以下の大会²を通して広がってきた。九州地区小学生パブリック・ディベート大会、エネルギーをテーマとした九州経済産業局主催の中学・高校のパブリック・ディベート大会、東北経済産業局主催のパブリック・ディベート大会、山口大学教育学部主催の小学生ディベート大会、そして 2024 年 1 月には経済産業省主催で初めてのパブリック・ディベートの中高生のオンライン全国大会が開かれた。ウェブ上では決勝戦の動画が公開され、パブリック・ディベートのルールやワークシートが入手できるようになっており、教育現場への普及に役立つツールとなっている。

田本他（2023）は山口大学教育学部と附属小学校が連携してパブリック・ディベートを社会科の授業に取り入れるプロジェクトを展開しており、以下のようにパブリック・ディベートの学習意義を唱える。

市民社会への参加となるように社会科教育をデザインすれば、ディベート学習の意義は明確となろう。ディベート学習は現実に生じている社会的論争を取り上げる。さらに、その解決に向けて議論する。それらのことで市民社会へと参加することができ

² 筆者は九州経済産業局主催の大会と全国大会に審判として参加している。その際に入手したルールやワークシートを授業の際に用いている。

る。(21)

パブリック・ディベートは、市民が社会問題に対して主体的に考え、議論し、解決策を見出す力を育む重要な手段となり、社会科だけでなく他教科での実践も検討する余地がある。

2.2 高専におけるパブリック・ディベート

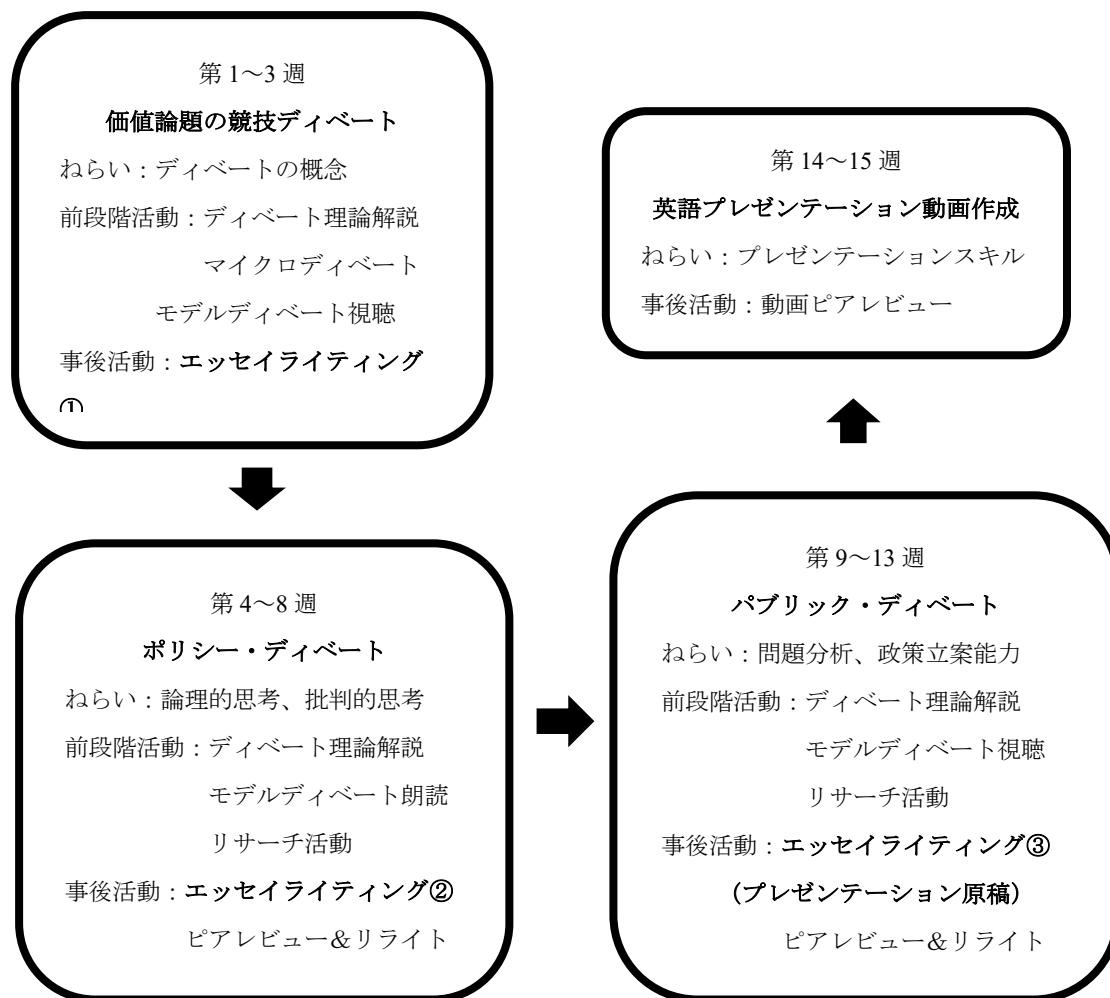
上田 (2023) は B 高専の 3 年生の少人数 (9 名) ゼミ形式の授業「グローバル・リテラシー」において、「育児支援」をテーマにした探究型学習のツールの 1 つとしてパブリック・ディベートを用いた。価値論題の日本語ディベートでディベートの概念を学習し、「男性正規労働者の育児休業の義務化」を論題として政策の是非を議論する日本語ポリシー・ディベートを体験した後に、「出生率を上げる育児支援策」をテーマとした、よりよい政策の提案を目指すパブリック・ディベートに取り組んだ。他ゼミ合同の最終発表会では、ディベートを通して考えた育児支援策をグループでポスターにまとめ、一人一人が来場者に対してポスター発表を行った。

上田 (2024a) は A 高専の令和 5 年度前期の 5 年生選択科目「人文社会特講」(受講者 30 名)において、日本語ディベートと英文エッセイライティングを組み合わせ、図 1 の授業デザイン (上田, 2024a, 123) でパブリック・ディベートを用いた。前年の B 高専での実践を活かし、アカデミック・ディベートとパブリック・ディベートの両方を取り入れている。各ディベートの試合に至る前段階の活動と試合をした後の事後活動も図 1 で示している。ディベート活動を通して思考力を高めること、試合や英語プレゼンテーション動画作成で口頭発表スキルを高めること、学んだ内容を英文エッセイでまとめることができることを授業のねらいとした。価値論題の日本語ディベートでは、「子育てをするならば東京よりも山口がよい」を論題とし、ポリシー・ディベートでは「男性正規労働者の育児休業の義務化」を論題とし、パブリック・ディベートでは「正社員の育児休業取得率を 100%にするための企業の支援策」をテーマとした。令和 5 年度前期の実践は、口頭での試合を 2 週に分けて 3 試合それぞれ行うことができた。

本稿で取り上げる令和 5 年度後期の実践は、受講者が 91 名の大教室の授業になり、議論のフィードバックを与える口頭での試合を複数回行うことは難しくなった。そのため、C 高専において Teams を用いて英語のオンラインライティングディベートを行った岡田 (2023) の実践³を参考にして、Teams 上に複数のチャンネルを設けて同時進行でライティング形式のディベートを行う授業形式をとることにした。

³ 岡田の実践は 8 回の授業の中で、6 種類のテーマにチームを振り分けて Teams の鍵チャンネルの中でスピーチを書き込んでいく形式で試合を展開している。ガイダンスやブレインストーミングを経て、4 回目の授業で立論投稿、5 回目の授業で相手チームに質疑を投稿、6 回目の授業で相手チームからの質疑への応答を投稿、7 回目の授業で反駁の構築と投稿、8 回目の授業で議論をセルフジャッジし議論まとめレポートを作成している。

図 1：上田（2024a）の授業デザイン



3. Teams を用いたパブリック・ディベート

令和5年度後期の授業デザインは前期と同じ（図1）にしたが、口頭ではなく Teams を用いるライティング形式にして、論題とテーマを変更した。ポリシー・ディベートの論題を「中国電力は 2030 年までにすべての石炭火力発電を代替発電に切り替えるべきである」、パブリック・ディベートのテーマを「エネルギー政策～エネルギー安定供給と脱炭素社会の実現の両立～」に設定した。以下、授業の背景、パブリック・ディベートの前段階活動、パブリック・ディベートの試合の手順、事後活動の英語プレゼンテーション動画作成について記述する。

3.1 授業の背景

本実践の科目「人文社会特講」（週1回、90分授業）は、世界に通用する技術者をめざすために、国際理解を深め、技術者としての倫理観とコミュニケーション能力を養うこと、を目標としている。英語科教員が5年生の授業を担当するが、授業内容は担当者の裁量に任

されていたので、日本語ディベートの活動をメインにして、英語のエッセイライティングやプレゼンテーション動画作成を発展活動として扱う授業内容にした。

後期クラスの受講者 91 名に最初の授業でディベート経験についてアンケート調査を行った。小学校で 48 名（複数回答可で、道徳 32 名、国語 29 名、社会 8 名、生活 6 名、英語 2 名）が経験し、中学校では 56 名（複数回答可で、道徳 35 名、国語 32 名、社会 14 名、英語 10 名）が経験していた。また、A 高専の授業においても 12 名（複数回答可で、英会話 4 名、建築系科目 4 名、哲学 3 名、生物 2 名）が経験したと回答したが、全員が履修した科目名が含まれていたことから、「ディベート」の言葉の定義があいまいな可能性がある。しかし、定義はあいまいなものの、受講者の半数以上がディベートを以前に経験していた。

3.2 パブリック・ディベートへの前段階活動

3.2.1 価値論題のディベート

1 週目から 3 週目にかけて、ディベートの概念を学ぶ目的で、価値論題のディベートに取り組んだ。1 週目は授業のオリエンテーションとして、ディベートの考え方を解説し、議論の流れを記録するフローシートの書き方を指示し、“Kyushu is better than Tokyo.”の論題の高校生の英語ディベートの試合⁴を視聴した。フローシートを記入し、勝敗の判定を考えた後で、審判の解説も視聴した。

2 週目は 1 チーム当たり 4～5 人で、肯定側 11 チームと否定側 11 チームを作り、次週のライティングディベートの準備をした。前回のモデルディベートが参考になるように、論題は「仕事をするのなら山口は東京よりもよい場所である」に設定した。立論だけでなく、自分のチームと相手チームの議論を予測し、質問、反駁、再反駁まで考えて Word に入力しておき、試合の際にコピーペーストできるように指示した。

さらに、テーマに関する理解を深めることと、スクリプトに使われている英文を後のエッセイライティングの参考にしてもらうことを意図して、TED Talks の動画を視聴した。手順として、長谷部（2018）が開発した TED Corpus Search Engine（TCSE）で論題に関係の深いキーワードを検索にかけて動画の候補を表示し、動画⁵を TCSE の視聴画面で英語と日本語同時字幕を流して視聴した。自学課題として、Microsoft Forms（以下、Forms）を用いて動画の感想とスクリプトを読んで知らなかった単語を 10 語抜き出すタスク⁶を与えた。

3 週目は試合をするチャネルを 6 つ作り、前半と後半に分けて、試合または審判の活動を両方経験してもらった。試合のフォーマットは図 2 のように設定した。肯定側と否定側の議論を別々の Talk 画面に投稿してもらい、返信機能で質疑応答、反駁、再反駁を入力してもらった。

⁴ 2004 年に行われた佐賀大学杯高等学校ディベート大会の英語部門の決勝戦の DVD と大会報告書に掲載されたトランスクリプトを使用した。

⁵ Julio Gil の“Future tech will give you the benefits of city life anywhere”

⁶ 上田（2024b）では、TED Talks の動画を自学課題とすることで、英語ディベートを行う際のリサーチやモデル文に活用できる可能性を述べている。

図 2：Teams ライティングディベートフォーマット ver.1

①肯定側立論投稿		④否定側立論投稿	
②否定側質問入力（3分）	↓	⑤肯定側質問入力（3分）	
③肯定側応答入力（3分）	↓	⑥否定側応答入力（3分）	
⑧肯定側第一反駁入力（5分）	←	⑦否定側第一反駁入力（5分）	↓
⑩肯定側第二反駁入力（5分）	←	⑨否定側第二反駁入力（5分）	
準備時間5分：①、④のあと			
準備時間3分：②、③、⑤、⑥、⑦、⑧のあと			

前半の試合が終わった後に、審判担当のチームのメンバーが各チャンネルに勝敗の判定と理由を投稿した。

家庭学習の課題として、同じテーマで好きな立場を選んで英文エッセイを書かせた。4 週目の前半にピアレビュー活動を行い、リライト課題を出した。

3.2.2 ポリシー・ディベート

4 週目から 7 週目に、論理的思考と批判的思考を学ぶ目的で、ポリシー・ディベートに取り組んだ。論題はディベート甲子園の論題を中国地方に限定して、「中国電力は 2030 年までにすべての石炭火力発電を代替発電に切り替えるべきである」にした。4 週目にポリシー・ディベートの理論について解説した後に、フローシートを取る練習のため、高校生の日本語アカデミック・ディベートの試合⁷を視聴した。5 週目にディベート甲子園の石炭火力の代替発電論題の論題解説資料⁸をリサーチの参考に配布し、決勝戦の YouTube 動画でフローシートを取る練習をした。受講者は決勝戦の動画があまりにも早口で難解な議論であることに度肝を抜かれた様子であったが、実際に議論をする際は初めて聞く人でも理解できるスピードで分かりやすく話すことが大事であることを伝えた。発電に関する知識を深め、英文エッセイの参考にしてもらうため、TED Talks の動画課題⁹を 5 週目と 6 週目に出した。

6 週目は前回と同じチームで、対戦相手を変えて肯定否定を指定し、グループごとに立論や反駁を考えてもらい、ワークシートに記入してもらった。7 週目に、試合フォーマットは前回と同じ形式で、Teams を用いてライティングディベートを行った。試合の進行については、前回は前半と後半に分けたものの、予想外のトラブルで投稿が遅れて表示されることが

⁷ 2006 年に行われた佐賀大学杯高等学校ディベート大会の日本語門の決勝戦（論題は外国人労働者受け入れ）の DVD を視聴させた。

⁸ 竹久（2022）の第 27 回ディベート甲子園高校の部論題解説 「日本はすべての石炭火力発電を代替発電に切り替えるべきである。是か非か」を用いた。

⁹ 5 週目は Henry Richardson の “What does the world's largest machine do?”、6 週目は Alex Gendler の “Building the world's largest (and most controversial) power plant”であった。

あり、議論内容についてフィードバックする時間や、受講生が判定の理由まで詳しく書く時間が取れなかったため、チャンネルを 11 に増やし、全チームが同じ時間帯に試合と審判をする形式にした。つまり、全チームが試合を終えた後に、受講者は審判をするように割り当てられたチャンネルの議論を読み、チャンネルに判定とその理由を投稿する形式にした。

家庭学習の課題として、同じテーマで好きな立場を選んで英文エッセイを課した。8 週目の前半にピアレビュー活動を行い、リライト課題を出した。

3.3 パブリック・ディベートの指導過程

8 週目後半から 11 週目に、問題分析と政策立案を学ぶ目的で、「エネルギー安定供給と脱炭素社会実現の両立」をテーマに表 1 に示すライティング形式のフォーマットでパブリック・ディベートに取り組んだ。図 2 の Teams を用いたライティングディベートフォーマット ver.1 では立論の投稿タイミングがチームごとに異なり試合時間に余裕がなかったことから、パブリック・ディベートを行うにあたり ver.2 では、最初の政策提案と最後の政策再提案は対戦チームが同時に投稿する形式に変更した。

表 1 パブリック・ディベートの試合形式

口頭形式のフォーマット (R6 年度全国大会形式)	Teams ライティングディベート フォーマット ver.2
①先攻チーム政策提案 (5 分) 後攻チーム準備時間 (2 分)	①政策提案投稿 (先攻後攻同時) 準備時間 (5 分)
②先攻チームの政策に対する質疑・意見交換 (6 分)	②後攻チーム質問、提案、先攻チーム応答やりとり入力 (5 分)
③後攻チームの政策提案 (5 分) 先攻チーム準備時間 (2 分)	準備時間 (3 分)
④後攻チームの政策に対する質疑・意見交換 (6 分) 再提案の準備時間 (10 分)	③先攻チーム質問、提案、後攻チーム応答やりとり入力 (5 分)
⑤先攻チームの再提案 (5 分)	準備時間 (5 分)
⑥後攻チームの再提案 (5 分)	④先攻後攻チーム、政策の再提案 入力 (5 分)

3.3.1 パブリック・ディベートのリサーチ活動

8 週目後半にパブリック・ディベートについて解説した後に、フローシートを取る練習として高校生のパブリック・ディベートの試合¹⁰を視聴した。

9 週目に日本企業のカーボンニュートラルへの取り組みを個人でワークシートにまとめ、グループの中で発表する活動を行った。10 週目の前半は海外のエネルギー政策についてグ

¹⁰ 2023 年 1 月に行われた九州経済産業局主催の省エネ政策提案型パブリック・ディベート高校の部決勝戦の動画を用いた。

ループごとに 1 つの国を調べてワークシートにまとめ、ジグソー学習で他のグループと他国の政策について共有しあった。さらに、カーボンニュートラルに関する知識を深め、英文エッセイの参考にさせるため、TED Talks の動画課題¹¹を 9 週目と 10 週目に出した。10 週目の後半は、次週に試合をするために、チームで政策をまとめてもらい、作戦シートに予想される相手からの質問とそれに対する応答を考えてもらった。

3.3.2 パブリック・ディベートの試合

11 週目は Teams を用いてライティング形式の試合を行った。ポリシー・ディベートののように、11 のチャンネルで同時に試合を展開した。

最初の政策提案のステージでは、図 3 のように政策名を分かりやすく明示し（ラベリング）、問題の背景についての見解を示し、提案する政策を支える理念、政策の具体的な内容、政策の効果について述べる。

図 3：政策提案の投稿

政策「炭素も事故もニュートラルタクシー」

現在、COP26及びCOP27等を経て、脱炭素に向けた取り組みが世界的に加速している。世界のESG投資額の増加、水素エネルギーの使用が進んでおり、多くの国や企業が2050年までのカーボンニュートラル実現に向けた目標を掲げている。また、世界では自動車のEV（electric Vehicle、エンジンを使用せずにモーターを動力として走行する電気自動車）シフトが進んでいる。EVシフトとは、ガソリンなどの化石燃料を使用する自動車からCO2排出がなく地球環境への負荷が少ないEVへの転換のことである。しかし、現状、水素自動車や電気自動車の導入はエネルギー補給設備が整っていないことやガソリン車と比べて走行可能距離が短いことから、再生可能エネルギーへの転換はエネルギー供給が安定しないことからあまり実現されていない。そのため、水素自動車や電気自動車、再生可能エネルギー導入のための投資を増やすこと、CO2削減をさらに促すことが新しい政策には必要である。

提案する政策を支える理念

・再生可能エネルギー・水素エネルギーの導入
・電気自動車の導入
・技術革新や開発への投資
再生可能エネルギーの効率向上により、化石燃料が再生可能エネルギーに置き換えられた脱炭素社会を理想的な社会像とする。

政策の内容

「炭素も事故もニュートラルタクシー」の政策内容を以下に示す。

1. タクシーなどの公共交通における水素自動車・電気自動車の導入
2. 高齢者免許返納の義務化によりCO2排出を削減する。

(理由)

1. : ガソリン車の利用を現段階で全て断ち切り水素自動車・電気自動車に置き換えることは困難である。そのため、電気自動車の導入をタクシーなどの公共交通のみに絞って適用する。
2. : 高齢者の免許返納を義務化することで、車両数を減らし、CO2排出量を減らす。また、高齢化の運動機能低下による事故発生を減らすことができる。免許返納を行なった高齢者には現在よりも質の高い特典を送る。

政策の効果

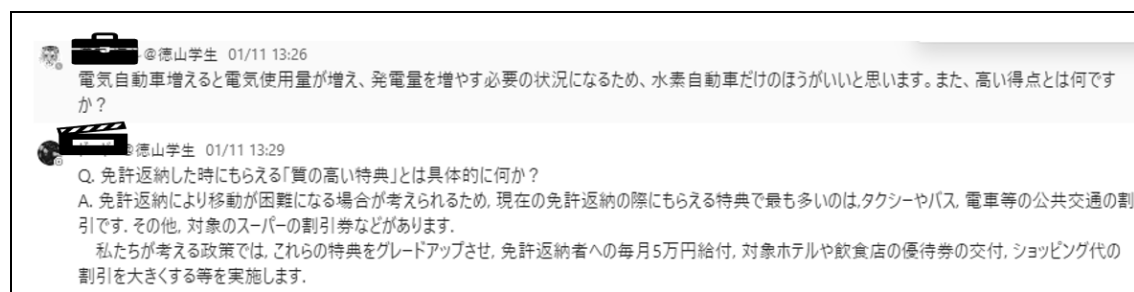
2030年までに化石燃料を使用したタクシーなどの公共交通車両をフェードアウトさせ、水素自動車・電気自動車へ転換する。この政策は、現時点で社会への応用が可能な技術を取り入れており、現在から2050年のカーボンニュートラル実現までの間に、短期間で実現できる政策である。

続いて、質疑応答・意見交換のステージでは、図 4 のように政策の不明確な点を質問し、

¹¹ 9 週目は Lisa Jackson and Liz Ogbu の“Apple's promise to be carbon neutral by 2030”、10 週目は Tshering Tobgay の“This country isn't just carbon neutral -- it's carbon negative”であった。

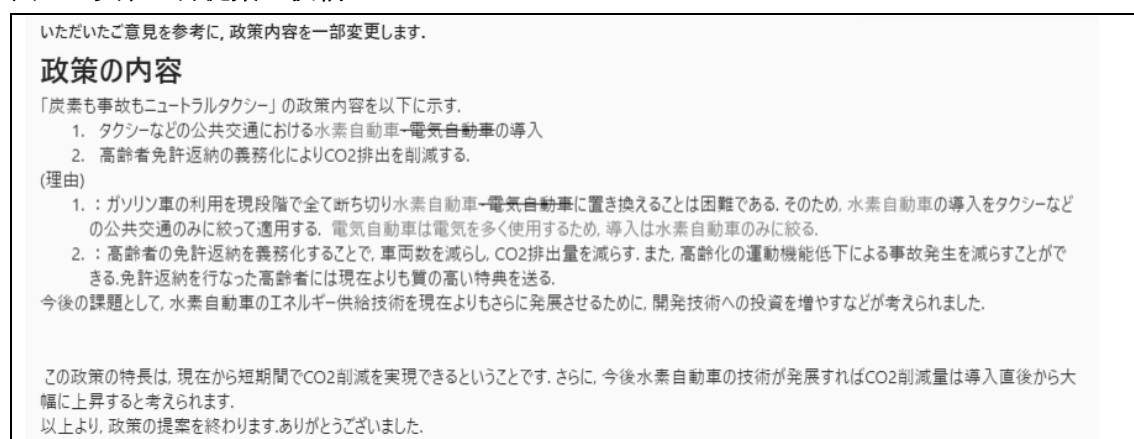
質問に応答する。またこの投稿には見られないが、相手チームに対して政策の改善点を提案することもできる。

図 4：質疑応答・意見交換の投稿



最後の政策の再提案のステージでは、相手との意見交換を経て当初の政策をどのように改善したのかを明示する。図 5 の投稿では、電気自動車を水素自動車に修正し、さらに赤字で改善した点を分かりやすく明示する工夫が見られた。

図 5：政策の再提案の投稿



3.3.2 パブリック・ディベートの議論の評価

11 のチャンネルで同時展開された試合の議論の内容について、表 2 のループリックを作成し、22 チームの投稿内容について評価を行った。

政策提案は、パブリック・ディベートのルールで明示された問題の背景、政策を支える理念（スタンス）、政策名を明示して具体的な内容、政策の効果について述べる必要があり、すべてのポイントを詳しく述べている場合はレベル 3 とした。

質疑は、相手のチームに対して論点を明らかにし、議論を発展させる内容の質問を 2 つ以上できている場合はレベル 3 とした。応答は、相手チームからの質問に対して必要とされる内容を分かりやすく回答できている場合はレベル 3 とし、回答はしていても内容が不十分の場合はレベル 2 とした。

提案は、相手チームへの質問と合わせて政策を改善する具体的な手段を示している場合はレベル 3 とし、政策の改善を見直す視点について「～はどうですか？」と尋ねている場合はレベル 2 とした。

政策再提案は、相手からの質問や提案を吟味して最初に提示した政策よりも改善している場合はレベル 3 とし、修正をしてもその意図が不明な場合はレベル 2 とした。

表 2：パブリック・ディベートの投稿評価ルーブリック

レベル	スピーチの役割				
	政策提案	質疑	応答	提案	政策再提案
3	政策名、問題の背景、政策を支える理念、政策の具体的な内容、政策の効果について全部詳しく述べている	論点を明らかにしたり議論を発展させる内容の質問が 2 つ以上できている	質問に全て分かりやすく回答できている	政策を改善する具体的な提案を示している	議論の内容を考慮したうえで改善した政策を示している
2	上記のいずれかの内容が説明不足	上記の質問を 1 つできている	質問に全て回答しているが内容が不十分	政策を改善する視点を示している	政策を修正しているが修正した理由が不明
1	上記の複数の内容が書かれていない	無関係の内容や語句の意味についての質問をしている	複数の質問に対して 1 つだけ回答している	政策に関連していない提案をしている	投稿はしているが修正点が分かりにくい
0	投稿なし	投稿なし	投稿なし	提案なし	投稿なし

表 3 は先攻後攻合わせて 22 チームの議論の流れをルーブリックに基づいて評価したものである。

表 3：チームの議論評価（N = 22）

	Level 3	Level 2	Level 1	Level 0
政策提案	15	6		1
質疑	17	3	1	1
応答	21			1
提案	8	11		3
政策再提案	10	8	2	2

11 チャンネルの中の 1 つで、2 チームのうち 1 チームが全く準備していなかったために試合が成立しなかった。準備していたチームの議論に対してはその場で考えた質問が 1 つ出されただけだった。準備したチームに対しては、筆者が質問と提案を投稿して、応答と再提案をチームが投稿して評価対象とした。1 チームの政策の投稿がなかったため、質疑と応答

と政策再提案と提案に Level 0 がそれぞれ 1 つカウントされている。

政策の提案、質疑、応答については Level 3 の割合が高く、試合の形は 10 チャンネルで成立していた。相手の政策に対して疑問点にとどまらず改善点を提案することや、相手からの提案を取り入れて政策を練り直すことは難しかったようである。

パブリック・ディベートの試合後にアンケート調査（回答者 84 名）を行った。自分のディベートのパフォーマンスについては、「満足している」が 13 名、「やや満足している」が 42 名、「どちらとも言えない」が 19 名、「やや満足していない」が 6 名、「満足していない」が 4 名であった。であった。試合前の準備状況については、自分たちの政策については、「政策提案、相手からのアタックの予想、相手への反論まで準備した」が 24 名、「政策提案、相手からのアタックの予想まで準備した」が 22 名、「政策提案だけ準備した」が 33 名、「準備不足だった」が 5 名だった。最初の政策提案よりも先を読んだ準備をしたのは全体の 54.7% である。相手の政策については、「複数の論点を予測し、質問や反駁の準備をした」が 37 名、「複数の論点を予測だけして言い返す準備はしていない」が 32 名、「準備不足だった」が 15 名であった。自分たちの政策以外を予想していたのは全体の 82.1% であった。

準備時間については、「相手の政策提案の議論を読んで質問を考える時間（5 分）」については、「長すぎる」が 1 名、「やや長い」が 4 名、「どちらとも言えない」が 35 名、「やや短い」が 40 名、「短すぎる」が 4 名であった。全体の 52.3% が政策提案の後の準備時間を短いと感じている。また、「質疑応答と意見交換のステージの後に、自分たちの政策を再提案する準備時間（5 分）」については、「長すぎる」が 1 名、「やや長い」が 2 名、「どちらとも言えない」が 35 名、「やや短い」が 39 名、「短すぎる」が 7 名であった。全体の 54.7% が最後の政策再提案の前の準備時間を短いと感じている。

「パブリック・ディベートを経験したことは自分の意見を組み立てるのに今後役立つか」については、「大いに役立つ」が 21 名、「少し役立つ」が 38 名、「どちらともいえない」が 22 名、「あまり役に立たない」が 3 名であった。全体の 70.2% がパブリック・ディベートの学習に対して有用感を感じている。

さらに、自由記述でパブリック・ディベートについての感想を尋ねた。表 4 はその一部抜粋である。

表 4：パブリック・ディベートの感想一部抜粋

A	ディベート相手や審判した他チームなどの案は自分たちからは出てこなかった切り口のものが多かったので、多角的な意見を聞いて噛み砕き再提案できる力をつける練習が必要だと感じた。
B	相手側の意見よりも自分側の意見の良いところ、自分側の意見より相手側の意見の方が良いところ、どちらも見つけて比較できるよう着目したいと思った。
C	これまでの肯定、否定に分かれたディベートと違い相手の政策を尊重しつ

	つ質疑や意見交換を通して改善していくといったディベートでとても新鮮だった。
D	お互いに質問しあうことで政策がより具体的になり楽しかったです。
E	あくまでも互いの意見を批判するのではなく評価し合うので楽しかった。
F	課題や動画で伝え方を学習していたため、前回のディベートよりも取り組みやすかった。
G	質問を制限時間ギリギリに投稿されたので、時間内に応答が終わりません。質問と、それへの応答は時間を分けてほしいです。
H	文章では制限時間内に複数の質問を送ることや返信することが難しいと感じた。
I	これまでのディベートよりも質問をどうやってすればいいか難しかった。
J	相手の意見と関連付けて再提案するのが難しかった。
K	審判の時、ディベートを読み取り、簡潔にまとめることが難しかった。

コメント A～E はパブリック・ディベートならではの、相手と議論をよりよくしていく過程にやりがいや楽しさを見出しているものである。コメント F は TED Talks が分かりやすく伝えることを学ぶのに役立ったことを示唆している。コメント G と H は試合の運営の仕方を改善する必要があることを示している。コメント I～K はパブリック・ディベートの際の学習者の困難点を表している。困難点を緩和するための示唆として、表 5 に「パブリック・ディベートの前にもう少し学習しておきたかったこと」の回答を示す。

表 5：パブリック・ディベートの前にもう少し学習しておきたかったこと

学習内容	人数 (N = 84) (複数回答可)
政策提案スピーチの構成	38
相手の政策への質問の仕方	27
相手の政策をよりよくする提案の仕方	21
相手に伝わるデリバリースキル	20
議論のメモの取り方	19
相手の提案を取り入れて自分たちの政策を再提案する仕方	15
自分たちと相手側の政策の比較の仕方	14
相手の反駁への反論の仕方	11
審判のやり方	9

今回の授業実践ではワークシートを用いたスピーチ構成の説明、モデルディベートの視聴、フローシートをとる練習は意図的に指導できた。しかし相手の政策を改善するための質

問や提案の仕方、相手の意見を取り入れて政策を再提案する仕方、口頭形式の試合動画で見られた議論の比較の仕方を効果的に指導することは今後の課題である。

3.4 パブリック・ディベートの事後活動

パブリック・ディベートの事後活動として、同じテーマで各自が最善の政策を考え、それを英語プレゼンテーション動画で発表する活動を第 12 週から 15 週にかけて行った。

試合を行った 11 週の最後に、英語プレゼンテーション動画の原稿作成を課題として出した。その際、原稿の英文テンプレート（資料 1）を配布し、Teams 上のフォルダに次の授業までに原稿を提出させた。12 週目には原稿を 3 人組のグループで回し読みし、ループリック（資料 2）を用いてピアレビュー活動をした。ピアレビューの評価を参考にして、課題として原稿のリライトを指示した。

13 週目には前期の授業で最優秀賞を取ったプレゼンテーション動画をモデルとして視聴させた。続いて Microsoft PowerPoint（以下、PowerPoint）のスライドに音声を吹き込んで MP4 形式の動画を作成する方法を紹介し、各自で作成作業を進め、次週までに Teams 上のフォルダに動画をアップロードするように指示した。アップロードされた動画の中には、音声が再生できないものや動画自体が再生できないものが複数あり、PowerPoint ファイル自体を提出してもらるか、授業の場で PowerPoint を用いて発表する様子を動画撮影する対応をとった。

14 週目の授業では、グループを作り、指定された他のグループの動画を視聴してピアレビューを行い、視聴した動画の中からベスト動画を選んでもらい、Forms を用いて投票を行った。15 週目には得票数が上位の複数の動画を全体で視聴し、Forms を用いて最優秀動画を選ぶ活動を行った。

4. 実践の総括

4.1 授業最後のアンケート

最終週に、前期の授業で実施したのと同じアンケート（上田，2024a：128）を振り返りとして行った。授業で身についたと感じられる力について 5 段階で自己評価してもらい、表 6 の結果になった。前期とは受講者数が倍以上違い、ディベートの形式も違うので単純な比較はできないが、大きな差がみられたのは②（前期 4.20、後期 3.49）、⑥（前期 3.86、後期 4.10）、⑧（前期 3.73、後期 4.27）の項目である。②の批判的に考える力については、口頭形式のディベートを行った際は、人数も少なかったなのでその場で議論の内容についてフィードバックを与えることができたのに対し、後期のライティング形式では論題が育児支援よりも科学的な内容で難しかったにも関わらず、試合進行で時間に余裕がなかったために十分なフィードバックを行えなかったことが一因かもしれない。

表 6：授業で身に着いた力

①自分の意見を論理的組み立てる力が身についた。								
②他人の意見を批判的に考える力が身についた。								
③他人の意見を聞いて不明な点や説明不足な点を的確に質問できる力が身についた。								
④ディベートのスピーチを議論の流れが分かるようにメモが取れるようになった。								
⑤社会問題の原因を分析する力が身についた。								
⑥社会問題を解決する政策を提案できる力が身についた。								
⑦他者と対話することでより良い政策を組み立て直す力が身についた。								
⑧論理的な英文エッセイを書く力が向上した。								
N = 90	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
当てはまる	47	27	35	42	46	29	37	45
やや当てはまる	32	35	37	36	25	47	38	29
どちらともいえない	7	10	14	8	17	9	12	12
やや当てはまらない	3	4	4	3	0	4	2	3
当てはまらない	1	1	0	1	2	1	1	1
5 段階平均値	4.34	3.49	4.14	4.28	4.26	4.10	4.20	4.27

4.2 今後の展望

本実践は筆者にとって初めて 91 名という大人数の受講者にディベートを実践するものであった。学校側の事情でイレギュラーな人数になってしまい、Teams を活用したライティングディベートを選択したのであるが、学生のコメントからもうかがえるように改善すべき点は複数ある。岡田（2023）の Teams を用いた英語ライティングディベートでは、立論、質疑、応答、反駁を別々の週に書き込ませ、ゆったりした授業過程を取っている。日本語ならば試合を 1 回の時間に全て書き込めると判断して、本実践では 1 回の授業の中で試合を強行したが、複雑な社会問題がテーマの場合は即興的に考えて文章化するのは日本語でも難しいことが明らかになった。受講者に批判的・論理的に考える時間を与えるために、パブリック・ディベートを行う際は事前に各チームの政策に目を通す時間を設ける工夫も考えられる。

パブリック・ディベートの試合の際に、相手チームへ提案することや、提案を受け入れて自分たちの政策を再提案する過程に困難が見られた。このやりとりは学習者にとってまだなじみのないスタイルなので、今回の様にアカデミック・ディベートを前段階の活動とするよりも、リサーチがあまり必要のない身近で簡単なテーマで複数回パブリック・ディベートを取り入れる授業デザインを試みることも考えたい。

筆者は令和 6 年度に日本語パブリック・ディベートのあとに英語パブリック・ディベートに取り組んでいるが、英語で行う場合の困難点や必要な指導についても今後検証を行う予定である。

引用文献

- 上田真梨子 (2023) 「ポリシー・ディベートを用いた協働的探究学習の試み」『佐世保工業高等専門学校研究報告』第 59 号, 35-46.
- 上田真梨子 (2024a) 「ディベートを活用したエッセイライティング活動の実践— 高専 5 年生を対象とした人文社会系選択科目のケース —」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』第 43 号, 121-130.
- 上田真梨子 (2024b) 「オンラインスピーチ動画を活用した英語自学課題の試み」『中国地区英語教育学会誌』第 54 号, 67-78.
- 岡田美鈴 (2023) 「オンラインディベートによるライティング能力と汎用的技能の向上」『基幹教育紀要』第 9 号, 169-182.
- 経済産業省資源エネルギー庁 (2024) 「全国大会ルール」 URL (最終閲覧：2024 年 9 月 29 日) <https://energy-kyoiku.meti.go.jp/wp-content/themes/energy/assets/debate2024/data/rule.pdf>
- 佐長健司 (2017) 「学び合う議論としてのパブリック・ディベート」. 佐長健司 (編) 『パブリック・ディベートから始めよう—主権者になるための学び合う議論—』, 1-8. パブリック・ディベート研究成果報告書.
- 竹久真也 (2022) 「第 27 回ディベート甲子園高校の部論題解説」 URL (最終閲覧：2024 年 9 月 29 日) <https://nade.jp/wp-content/uploads/2022/02/a0453d67d8cc3d00e00fc4b237e84a41.pdf>
- 田本正一・森朋也・山本孟・田島大輔・千々松哲大 (2023) 「市民社会への参加としてのパブリック・ディベート学習の考察—小学校社会科における実践事例を踏まえて—」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第 56 号, 21-30.
- 長谷部陽一郎 (2018) 「TED Corpus Search Engine : TED Talks を研究と教育に活用するためのプラットフォーム」『英語コーパス研究』第 25 号, 159-171.

資料 1 英語プレゼンテーションのテンプレート

The plan to realize the balance of stable energy supply and carbon neutral society.

Class () No.() Name()

* 以下はフォーマットですが、使わない語句や日本語の指示文は提出する前に消してください。

Today's topic is How to realize the balance of stable energy supply and carbon neutral society. In order to realize carbon neutral society keeping stable energy supply, I'd like to present effective plan to change Japanese society.

The contents of my presentation are, first the problem of carbon emission and energy supply, second what is important to solve the problem, third the new plan to solve the problem, and finally the effect of the plan.

First, the problem of carbon emission and energy supply.

(日本の CO₂ 排出や電力供給の現状や、2050 年までの目標について説明、それについての自分の見解を示す。)

Second, what is important to solve the problem

(問題に取り組むうえで、何を重視することが大事か、どの方面からアプローチすればよいかを説明する。例：国民の意識に働きかけて省エネ、製造業の CO₂ を減らす、運輸部門の CO₂ を減らす、安定供給できる電力の研究にける投資資金を集める、国の予算を確保するための手段を整える、など)

Third, the new plan to realize carbon neutral society keeping stable energy supply. In order to solve the problem, I'd like to present the new plan: "行う政策の名称". I explain the detail.

具体的な政策を説明

Finally, the effect of the plan. I explain how the plan solve the problem.

プランを実行することでどのような効果が得られ、どのように社会が変わっていくか、それはなぜいいことなのかを説明

Thank you for listening to my plan.

資料 2 英語プレゼンテーション原稿の評価ルーブリック

プレゼン原稿を読んで、各項目のレベルを判定して（□□）に記入してください。⇐

⇐	構成⇐ （□□□）レベル⇐	現状分析⇐ （□□□）レベル⇐	重要なこと⇐ （□□□）レベル⇐	プラン⇐ （□□□）レベル⇐	プランの効果⇐ （□□□）レベル⇐
5⇐	プレゼンの流れについて、話す順序を示し、First、Secondなどのナンバリングができています。フォーマットの不要な日本語などをきちんと消している。⇐	日本のCO2排出とエネルギー安定供給の両方の現状について、根拠や具体例を挙げて問題提起ができています。⇐	問題に取り組むうえで、何が重要なのか明確に示し、理由や根拠を挙げて説明できています。⇐	政策の名称を明示し、具体的なプランを説明できている。⇐ ⇐	政策を実行することでどのような効果が得られるのか、それは社会にとってどのようにいいことなのかを説明できている。⇐ ⇐
3⇐	プレゼンの流れについて、話す順序を示し、First、Secondなどのナンバリングができています。フォーマットの不要な日本語などを消していない。⇐	日本のCO2排出とエネルギー安定供給の現状についてどちらかの説明が欠けている。または両方について問題提起できているが、根拠や具体例が不十分である。⇐	問題に取り組むうえで、何が重要なのかを示しているが、理由や根拠が十分に説明できていない。⇐	政策の名称を示していない、または名称は示したは何をするのか分かりにくい。⇐	政策を実行することでどのような効果が得られるのか、または社会にとってどのようにいいことなのか、どちらかの説明が不十分⇐
1⇐	プレゼンの流れが分かりにくく、First、Secondなどのナンバリングができていない。また、フォーマットの不要な日本語などを消していない。⇐	日本のCO2排出とエネルギー安定供給の両方の現状について、キーワードだけ挙げている、またはほとんど述べていない。⇐	問題に取り組むうえで、何が重要なのかキーワードだけ挙げている、またはほとんど述べていない。⇐	政策の内容が不明確、または政策を示していない。⇐	政策を実行することで得られる効果を明確に示していない。⇐

合計点（□□□/25）⇐

<内容についてのコメント>⇐

・もっと説明がほしい部分、根拠があいまいな部分、英語の表現についてコメントをしてください。⇐